

# 色彩にこだわっていた春の四連詩

尾世川正明

\*

## 生きることを休むための扉

その扉は無地の木でつくられている  
ベンガル州の森のなかに質素な土の家があつて  
その奥に扉はあつた  
晴れた二月のその朝は扉の周囲に  
西インドのきよらかな光がさしこんでいた  
扉の表面は透明で翅のような光で覆われていた  
訪れた若者はその扉に魅せられると  
石でできた顔のない彫像になつた

\*

## チューリップの茎

チューリップのハナの下は長いという  
庭で測ってみると十センチはあつた  
わたしの鼻の下よりはずっと長い  
イスラムではチューリップはアッラーの象徴  
イスタンブールのモスクで  
壁のモザイクのなかを満たしている赤い花  
くりかえされるチューリップの文様  
アッラーは忙しい

\*

## 扉を愛するひとのための扉

扉を愛する人が行きつけのは  
十五世紀の貴族が作ったレンガの館  
石の壁は一つずつわずかに色が異なる桜色

厚い木の扉は南フランのエルコラーノ・レッド  
壁に埋めこめられた窓は空を映したラビストラズリ  
向かい側もうひとつの窓にはオークルのカーテン  
それはブルーージュの穏やかな一日  
二〇一一年のイースターの朝

\*

### 銀の馬車が走る深夜

描かれた 風のなかで桜の花びらが舞う  
明け方までずっと床の中で目覚めている老人  
頭のなかを駆け抜ける車輪の音を聞いている  
馬車はどこからきてどこに行くのか  
墨に流し込まれた眠られぬ性欲  
曙に菜の花が咲く土手の道を過ぎ  
河口に広がる沼地のほそい道を走り過ぎて  
はるかなる避地をめざしてゆく